

# Die Eiche

ディ アイヘ  
http://www.jdg-chiba.com



Japanisch-Deutsche  
Gesellschaft der Präfektur  
Chiba

〒270-2214松戸市松飛台556-12  
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdg-chiba.com



協会Home Page

## 2022年度-年次総会

-書面審議にて行われる-

常任理事事務局長 植松 健

2022年度千葉県日独協会年次総会は、依然新型コロナウイルス感染拡大の収束の目途が立たない状況のため、従来の一室に会する総会は今年度も不可能となり、昨年一昨年同様に郵送による書面表決方式により審議が行われました。

前段階として、理事会についても書面表決方式にて開催し、年度総会提案議題の審議を行い、総会に諮る議案を決定しました。理事会の決定に基づき、書面形式の年次総会の開催は4月9日付にて全会員に総会資料を郵送し、審議結果を返送していただく方法にて行われました。

会員数111名（回答期限時点）の内、議案に対する賛成69名、反対0名、未回答42名となり、賛成会員は過半数の56名を超えており、第26回年次総会議案は規約第十条第3項の規定に基づき、多数決にて原案通りすべて承認されました。会員の皆さまご協力いただき有難うございました。

### 千葉県日独協会総会議案書抜粋(承認済み)

#### ■2021年度事業報告（実施事項のみ記載）

##### 1. 主な会議：

運営委員会（メール、オンラインにて）、理事会（書面表決方式）、年次総会（書面表決方式）

##### 2. 主要行事：

- 定例行事：ドイツ軍人慰霊祭、新春講演会
- 文化教養行事：ドイツ語講習会、ドイツ語入門研究会
- 青壮年部会主催行事：ドイツパンと料理を楽しむ会、会員への最新ドイツ情報提供（Facebook）、Stammtisch（Zoomドイツ語を交えての交流会）
- 菩提樹委員会
- 千葉女子高校演奏会後援、習志野第九演奏会後援

##### 3. 特別行事：

- 県内日独関係行事への参加：国際フェスタ千葉、市川ドイツデー
- 協会設立25周年記念：Die Eiche創立25周年特別号発行
- 日独交流160周年記念：日独若者懇談会、記念講演会「近現代の旧ドイツ領と日本」を開催、パネル「ドイツの食文化を広めたパオリアたち」（独大使館）
- デュッセルドルフ地域洪水被害への義援金募集
- 駐日ドイツ大使との懇談会

##### 4. 協会通信「Die Eiche」：編集委員会を開催し、偶数月年6回発行

##### 5. 協会ホームページ運営、管理：ITの積極活用継続確認

#### ■2021年度(令和3年度)決算及び監査報告

一般会計実績：収入の部合計1,473,693円、支出の部合計489,018円、次期繰越金984,675円、特別会計実績（日独友好及び記念行事）：収入の部合計1,059,089円、支出の部合計358,985円、次期繰越金700,104円の決算となり、監事の適正を認める監査報告書も添付され承認されました。

#### ■2022年度(令和4年度)事業計画

新型コロナのため依然不透明ではありますが、今後の状況の推移を見ながら、できるだけ対面での行事開催が可能となるべく工夫を凝らし、並行してオンライン開催も積極的に取り入れて参ります。

青壮年部会を中心として組織の活性化のため、新規会員増に努めるとともに現会員との連携強化も図ります。

1. 主な会議：2021年度同様。但し、記念講演会・懇親会は中止
2. 主要行事＊定例＊文化教養＊特別（各行事とも従来実施してきた行事及び新企画を計画します）
3. 協会通信「Die Eiche」発行。原則偶数月年6回発行予定。
4. 協会の情報発信の在り方の検討（EicheとHPの棲み分け、費用軽減等）
5. 全国日独協会連合会総会(4月から秋に延期)
6. 独日協会アムニダラインとの交流、千葉県国際課との連携強化

#### ■2022年度(令和4年度)収支予算

一般会計予算：収入の部合計1,437,177円、支出の部合計630,000円、次期繰越金合計807,177円・

特別会計予算(今期からひとつにまとめます)：収入の部合計847,109円、支出の部合計167,200円、次期繰越金679,909円合計にて予算が承認されました。

■2022年度役員、下表の役員が承認されました(下線は新任)。その他、運営委員会は青字で示した以下13人のメンバーで開催することが報告されました。

#### 役員（任期 2022年4月～2024年3月）

名誉会長	平尾 浩三	宗宮 好和
会長	金谷 誠一郎	
副会長	木戸 裕	
常任理事兼事務局長	植松 健	
常任理事兼会計担当	本橋 緑	
常任理事	安藤 永一	勝見 浩明 志賀 久徳
	田中 瑛	土屋 有里 本間 実里
	吉川 三朗	
理事	石元 成子	大野 亘児 岡村 三郎
	木戸 芳子	草本 晶 坂田 博
	杉田 房之	須古 正恒
	竹内 優（個別案件でサポート）	
	田中 正延	友野 信善 内藤 敏子
	中村 孝子	永池 克明 堀江 弘隆
	松江 美代子	宮藤 宏 室田 真由見
	綿貫 尚	
監事	中野 泰行	湯浅 正人
顧問	カルステン・キーゼヴェッター 武官	
	(ドイツ連邦共和国大使館ドイツ陸軍大佐)	
	堺 一夫	
	(陸上自衛隊第一空挺団長兼習志野駐屯地司令 陸将補)	
	林 節子(清和会理事長)	
名誉会員	白井 日出男	田久保 忠衛 伊藤 良昌 伊藤 光昌

## 新事務局長の抱負

4月の2022年度総会(書面決議)におきまして、正式に事務局長に就任いたしました。

まずはこれからの2年間、与えられた任期を全うすべく全力で邁進してまいります。

この先どんな困難や高い壁にぶち当たろうとも、常に判断の軸足は「千葉県日独協会の会員の幸福と発展のため」に置いて、冷静かつ迅速に行動することを誓います。



私は2年前、千葉県日独協会の理事を拝命した際、「“mit Corona”時代に向けた変革」の重要性を訴え、そしてこれまで運営委員としてその信念に基づいて実行してまいりました。これからも、コロナのせいでできないことを数えることはせず、常にピンチはチャンスととらえ「今だからこそ出来ること」を日夜追求して参ります。

香川生まれの千葉育ち、性格はドイツ人という風変わった新米事務局長ですが、どうか皆様、これからも一層のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

(常任理事：植松 健)

## オンライン・国際シンポジウム 「新しいシーボルト研究への道」 参加報告

国立歴史民俗博物館(佐倉市)主催による、「新しいシーボルト研究への誘い」と題したオンライン国際シンポジウムが、1月15日午後6時からに約3時間に渡り日独同時開催で行われました。

開会の挨拶、趣旨説明及び司会は、2018年2月に当協会の新春講演会(Die Eiche No112同年4月号に詳しく掲載、田中編集長)で講演をお願いした久留島浩同博物館前館長により行われ、日独9名の教授及び博物館関係者から研究成果と課題等の発表があり、これまでの約20年近くの研究を整理し共有し、導き出した新しいシーボルト研究の可能性と課題についての発表がありました。

まず、日高薫同歴博教授より、「シーボルト関係資料の調査・研究・活用事業の成果と課題」についての発表があり、個人レベルを超えた総合的な研究を行い、在外資料の調査等により過去からの資料情報の共有化を行い、物資料と文献資料を並行して研究することにより新事実が確認されたこと、2016年以降、彼のコレクションの歴史的意義を考えるため、「よみがえれ！シーボルト日本博物館」の企画展示会(Die Eiche No102、2016年8月号に掲載)を開催し、ミュンヘン五大陸博物館所蔵のコレクション等を展示したこと、その他の成果が報告されました。

次に、ミュンヘン五大陸博物館の副館長ブルーノ・リヒツフェルト氏から「シーボルト・コレクションと最後の日本博物館展示から」と題しての発表があり、同博物館のシーボルトが持ち帰った膨大な展示物に対し、1から5のブースに分けて展示映像を交えた具体的な説明がありました。

特に、漆工芸品、阿弥陀如来・菩薩、着物、日常品等の展示について、江戸時代の裕福な贈り物が人気を集めており、展示物の説明に

はシーボルトが語るような工夫を凝らし、歴博の協力により日本語の解説書も用意されているとのことでした。

また、東京都江戸東京歴史博物館の小林純一館長からは、「在外日本関連資料の調査、研究、活用の可能性について」と題し、自らは1996年からシーボルト研究に関係しつつ、シーボルトと関係の深い米国のモース氏のコレクションの研究も行っており、グローバル化の時代にコロナ禍で研究が遅れることのなきよう、在外日本関連資料の研究、コレクションを進める旨の発表がなされました。



ミュンヘン五大陸博物館による展示内容

その他の研究関係者からも専門的見地による具体的研究成果と課題が発表されましたが、いずれも情報を共有しさらに研究を進める旨の発表でした。

最後に国立歴史博物館から、来年以降に「外交と日本コレクション、19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地及びオンライン空間における活用」というテーマで調査研究の対象を広げることが報告されました。

折しも、コロナパンデミックの最中に行われた国際シンポジウムには約80名の参加があり、主催者側からは、これで研究が終わることなく、まだ世界中にあるシーボルトの資料研究を新たなスタートに立って進める意向が示され、パンデミックが終結し現場で直接会って研究が進められることを願うと共に、歴博への研究活動支援の要請を持ってシンポジウムは締めくくられました。

\* 掲載画像は、全点、講演会で公開された画像より引用

(常任理事：志賀 久徳)

モース自身の収集品 (点)		Collected by E.S. Morse himself	
①絵画 Art	200	③宗教 Religion	110
②アイヌ Ainu	30	④看板 Shop Sign	2
③考古 Archeology	390	①型紙 Stencils	10
④建築 Architecture	7	⑥布地 Textiles	20
⑤陶磁 Ceramics	1,050	⑦社会道具 Tools and Profession	290
⑥生活用具 Household and General	390	⑧玩具 Toys, Games, etc.	110
⑦紐付 Netsuke	30	⑨武器 Weapons	40
⑧服飾 Personal Accessory	200		
		合計(点) Total	2,880

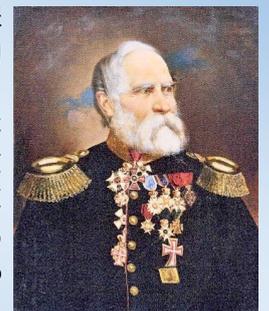
モース氏のコレクション一覧



研究者トラウトによる私財を投じた日本研究

## Philipp Franz Balthasar von Siebold

(1796-1866) 1823年長崎に来日したドイツの医師、動物学・植物学・民俗学者。19世紀に2度来日し、江戸時代の日本に近代的西洋医学を伝えた。日本の自然や生活文化に関する膨大な資料をヨーロッパに持ち帰り、日本博物館構想を進めるなど日本紹介に情熱を傾けた。1866年ミュンヘンにて没。



## ドイツの街紹介

-Leipzig-

数年前の夏に、ライプツィヒからデュッセルドルフまで、18日間に及ぶレンタカーでの旧東独から旧西独の各地をめぐる自由な旅をしました。そのスタート地を選んだライプツィヒの町は、未だ旧東独の匂いを残した印象深い歴史ある町でした。

当協会で2006年から6回に渡り行われたドイツ研修旅行でも2回この町が含まれており、思い出をお持ちの方も多いことでしょう。

まず、ヨーロッパ最大級といわれる中央駅は、大きな駅舎と広い駅構内に古い建物ながら三層に及ぶ大規模駅型店舗を備えています。駅前の風景は多彩な色のSバーンが行き交い、情緒ある古いドイツの街そのものでした。

この町は音楽の歴史も古く、トーマス教会の音楽監督として活躍したバッハが有名ですが、その他、シューマン、メンデルスゾーン、ワーグナーの業績も残っています。

中でもトーマス教会にはバッハの像とお墓があり、また、トーマス教会少年合唱団は有名であり世界で活躍しています。傍のバッハ博物館では生涯の偉業が紹介されていました。

1901年にライプツィヒ音楽院に留学した滝廉太郎の記念碑は、彼の下宿していた場所に日本語の文字も刻まれてひっそりと建てられています。

また、学問の分野では1409年に創立された名門ライプツィヒ大学が町の中心にあり、ゲーテやニーチェ、森鷗外が学んだとされています。現在は当協会の大野理事が留学中であり、千葉大も同大学から留学生を迎えています。町の中央にある大学をやっと探し当てましたが、斬新な建物と歴史的建物には、その重みの中に自由な雰囲気も感じました。その他、市内の菩提樹の横に立つ若きゲーテ像、ルネッサンス様式の旧市庁舎と広場、レトロなパサージュを散策し、昔は音楽家も通ったドイツ最古のコーヒー店「カフェ・パウム」で休息すれば、学芸の町の雰囲気を堪能できます。

ご承知の通りライプツィヒは平和革命の町といわれています。それは中心部に位置し旧東独時代に平和的な反政府運動が起きたニコライ協会があり、その一歩はやがてベルリンの壁崩壊に繋がったからです。厳かな協会の中に入ると、当時の市民の不安と勇気ある行動が伝わってくるような厳粛さがありました。

現在は、2年以上続くコロナ禍に加えてウクライナ戦争が始まり、東西冷戦の過去を思い起こすことになっていますが、戦争が拡大することなく、これからも平和で統一された歴史あるドイツの素晴らしい風景を味わいたいものです。また、自由に海外旅行ができる日が来ることを願っています。(常任理事：志賀 久徳)



ライプツィヒ中央駅



トーマス教会全景



ゲーテ像前



ニコライ教会聖堂



アウトバーン走行中の筆者

## 旅行業を通じたドイツ体験



ドイツと私 - 片島 辰一郎

大学を卒業後、長らく勤めた旅行会社でルフトハンザドイツ航空の予約担当になったことがドイツに興味を持ったきっかけでした。日本でヨーロッパアルプスハイキングツアーを最初に紹介した、日本人初のマッターホルン北壁登頂者である芳野満彦(故人)が創業したアルパインツアーサービス(株)ではアルプスの三大リゾートと呼ばれるシャモニ、ツェルマット、グリンデルワルト周辺を歩くハイキングだけでなく、チロルやドロミテ、ピレネーなど、ヨーロッパの様々なハイキングフィールドを訪れるツアーを販売していましたが、日本からの航空便としてよく使っていたのがルフトハンザドイツ航空、ヨーロッパの中央に位置し、フランクフルトまたはミュンヘンで乗り継いで多くの都市にアクセスできるルフトハンザは大変使い勝手のよい航空会社でした。



当時は航空会社の営業担当の方に誘われて飲みに行ったり、例えば観光業界にとって本当によい時代だったと思います。ある年、5月の連休が終わって、夏の忙しいシーズンが始まるまではまだいぶん時間がある空いた時期、ルフトハンザドイツ航空の旅行会社社員向けの優待航空券を使って、一週間ほど一人で旅行をしたのがはじめてのドイツ体験でした。



ノイシュヴァンシュタイン城全景



ツークシュピッツェとアイブゼー

ミュンヘン到着後、まずはノイシュヴァンシュタイン城、それからドイツ最高峰ツークシュピッツェに登り、キリスト受難劇のオーバーアマガウヤリンダーホーフ城を見学し、あとはロマンチック街道を北へたどって、ネルトリンゲン、アウクスブルグ、ディンケルスビュール、ローテンブルグ、ビュルツブルグと魅力的な街々を尋ね歩き、試行錯誤しながらなんとか無事にフランクフルト中央駅までたどり着いたときは正直、ほっとしたのを覚えています。



フランクフルト中央駅

恐らく、その5年程、経過した頃でしょうか。Japan Times の求人広告を見て応募したJTB ヨーロッパのオペレーション・マネージャーにまさかの内定、赴任先として決まったのが偶然にもドイツでした。フランクフルト空港からSバーンで中央駅へ。数年前のドイツ一人旅の終着点、懐かしい風景の駅前に再び降り立った時は、なにやらこそばゆい感じで胸がいっぱいでした。その後、フランクフルトで約二年を過ごし、タイのバンコクへ旅立ったからはやくも二十年が経ちました。今でも目を閉じると懐かしいあの頃の思い出が甦ってきます。

## 新理事の抱負-理事着任に当たって

はじめまして。この度、理事および運営委員となりました坂田でございます。私が当協会に入会いたしましたのは2年程前であり、40年程前（1982～1986年）の4年間、旧西ドイツ・フランクフルトに証券会社の駐在員として勤務させていただき、今を思えば、非常に良き時代を過ごさせていただきました。その関係もあり、ドイツに対する思いは強く、入会以降は、ドイツ語講座やオンラインシュタムティッシュ等に参加させていただき、駐在員時代に戻った感じで、嬉しく思っております。しかし、昨今は、日本経済の環境変化や欧州地域への業務派遣の減少等もあり、若手社会人の間で海外勤務に興味を示す比率が低下しているとの報道もあります。その現状に対し、寂しく感じるのは私だけではないのか、と思います。そのような環境下、当協会では運営委員を中心として、メンバーの皆様が日独交流の維持拡大のため、青壮年メンバーの加入拡大促進等を含め、積極的な活動を遂行されていることに深く感銘いたしておりました。理事（運営委員）としての抱負として、私のモットーである、まず‘行動’を当協会でも活用いただければ、と思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。（理事：坂田 博）



こういうテキストを自力で読んでいくためのヒントのようなものを少しは示すことができたのではないかと思います。」

（常任理事：本間 実里）

## ■オンライン食文化講演会-オーストリアからマルツァイトを終えて-

当協会が協力することになって3回目となるオンライン食文化講演会<オーストリアからマルツァイト>が4月23日（土）に開催されました。東京・赤坂にあるドイツ文化会館1階のドイツ・オーストリア料理レストラン「Mahlzeit（マルツァイト）」から中継されるこの催しは、日独文化協会主催で5回目となります。参加申し込みは53名で当協会からは5名が参加されました。またオプションとして、参加者はマルツァイトに当日メニューを注文でき、今回130食分が注文されたとのことでした。

今回のテーマは「春を呼ぶSpargel（ホワイトアスパラ）」でした。ホワイトアスパラガスはドイツやオーストリアで春を告げる食べ物としておなじみです。はじめに、日本・オーストリア食文化協会会長飯田章氏によって、春のイベント、イースターにまつわる食事や街の様子と、当日メニューにまつわる文化的歴史的背景のお話が、豊富な映像資料と楽しいお話によって繰り広げられました。



次に厨房からマルツァイトのシェフ山口雅鷹氏による料理風景に移りました。メニューは、鶏肉とパンプキンシードのパテ、ひよこ豆のスープ、ホワイトアスパラのオランダソース、シシーの小さなトルテでした。流れるような手際良さとプロならではのコツなども聴けて目が離せません。オンラインの良さは、テレビのように手元まで見られることに加えて、リアルタイムに質問できることです。この日も、調理中に参加者が感じた疑問がその場で解決され、ライブの醍醐味を味わいました。

最後の質問コーナーでは、飯田氏と山口氏と参加者による和やかな会話が盛り上がり、会が閉じられました。

当日参加が出来ない方やインターネットの不調があった場合のための録画配信や、当日時間的な制限で出来ない部分も網羅した完全版の調理映像の録画配信など、フォローも手厚く、今後も楽しみな催しです。

（常任理事：土屋 有里）

## 活動報告

### ドイツ語講習会

### オンライン食文化講演会

#### ■オンラインドイツ語講習会 -ドイツ語継続講習会を終えて-

昨年のドイツ語講習会に続き、同じテキストを使って今年1月から岡村三郎先生（早稲田大学名誉教授）、同じ受講生7名と継続講習会が行われました。生憎、最後まで読み切ることは出来ませんでしたが、文法・文脈について、先生から毎回丁寧に説明いただき、90分が短く感じられました。



講習会参加者 集合写真  
岡村先生：中段 左端

講習会終了後、受講生の中で、最後まで読まれた方からの質問に対し、先生からご回答いただいたところ、質問された受講生から「先生に教えていただけてようやく腑に落ちました。他の部分も明解なご説明をいただけてすっきりしました。多分、質問させていただいたのと別の部分にも、誤読している箇所がまだまだありそうな気がしますが、それでもいづらか原作の意味に近づけたような気がします。」とお礼のメールをいただきました。最後まで読み切れなかったことで、結末はどうなるのだろう？という想像が逆に膨らみ最後まで読まれた方に見習って、私も続きを読んでみよう、と思っている今日この頃です。

岡村先生よりメッセージを頂戴しました。「昨年秋の講習会ではReiner KunzeのEine stadtbekannte Geschichteをテキストにしました。残念ながら思ったほどには読み進むことができず、どうしようかと皆さんに尋ねました。「続けて読みたい」という希望でしたので、今年の1月後半から講習会を続けました。こういうときにはzoomというやり方はフレキシブルで便利ですね。この5回の追加講習会にも全員が参加してくださり、毎回熱心な質問を受けました。結局読み終えることはできなかったのですが、皆さんの質問に対する答えの中で、これから

## 今後の予定

- 運営委員会 6月11日（土曜）15:00-17:00
- 全国日独協会連合会総会 6月書面審査

## 会員情報

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人清和会、  
(株)京葉ビル管理、(株)和幸電気工事

## 編集後記

2022年度がスタートしました。今後の協会活動について新たな試みもチャレンジしたいと思っております。年次総会の審議資料にも記載されていますが、運営委員と一体となり、青壮年部では、今年、ドイツ歴史研究会、ドイツ語/ドイツ文学研究会、日本語/日本文化研究会、ドイツ地誌研究会を青壮年部を中心に始動しました。趣旨は、千葉県日独協会における活動の活性化、他地区の日独協会との交流に際して、当協会の専門的な知見の集約を図ることとなります。日本語/日本文化研究会においては、日本語、日本文化の知見を深めたいドイツ語圏の人々とオンラインでの懇談会開催に向けた実務準備がスタートしました。組織の活性化という意味において、関心あるテーマへの会員の皆様からのご参加を歓迎します。その際は、勝見までご一報くださいますよう、よろしくお願いいたします。（勝見 浩明）